

2022年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/9/30

団体名	NPO法人マミーズ・ネット	活動タイトル	児童虐待を未然に防ぐための寄り添い型支援事業	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景	
● 地域の望ましい社会状況(ビジョン)	<p>当団体の実現したいビジョンは「子どもの幸せを願う全ての人々が、地域で支え合って子育てしていける社会の実現」である。子どもを授かった時から地域の中に親子が包摂され、親も子ども共に成長しながら、「自分の居場所がある」と安心感をもって暮らしていける社会を目指す。</p> <p>具体的には、親子が交流や地域との結びつきの中で自己肯定感を育み、自分らしさを大切にしながら子育てができること。そして、親子の気持ちに寄り添いながら支援できる子育て支援者が地域に多く存在すること。これらを通して、児童虐待を未然に防ぐことである。</p>		<p>「なかみをふやそう！わたしのしつけちえぶくろ」の様子 2023.3.2開催</p> 	
● 団体の社会的役割 (ミッション)	<p>当団体のミッションは「地域で支え合って子育てできる環境を整えること」である。具体的には、以下の取組を推進する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 親同士が交流の中で子育ての喜びや悩みを共感しあい、共に支え合う場をつくる 2) 子育て中の保護者が「虐待手法によらないしつけ」を学び、わが子にあったしつけについて考える機会をつくる 3) 親子に寄り添い、その力を引き出せる子育て支援者を地域に増やす 4) 男女共同参画の視点を持ち、「子育てを社会全体で支援していく」というメッセージを広く地域へ発信し続ける 			
● 団体の活動基盤	<p><人材育成> 職員が自身のスキルアップやキャリアプランについて見通しを持って働き、その専門性を高めていけるためのスキームが構築されること</p> <p><リソースの確保・活動資金> 解決すべき社会課題にフットワーク軽く着手できるため、自主事業や寄付等の自主財源を強化する</p> <p><ナレッジ> 寄り添い型支援を実施できる人材を育成するための知見やノウハウを可視化し、プログラム化</p>			
■ 活動報告			■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)	
<p>本事業は児童虐待を未然に防ぐため、「寄り添い型支援事業の普及」と「地域で支え合う子育ての推進」を目的として、下記4つの取組を実施した。</p> <p>(1) 子育て中の保護者向け虐待を未然に防ぐためのWS「なかみをふやそう！わたしのしつけちえぶくろ」3回開催→子どものしつけをテーマにしたワークショップ。参加者のべ30人。切れ目のない支援を行うため、従来の対象である乳幼児だけでなく、しつけの悩みの幅が広がる学童期の子を持つ保護者に広げて初めて実践した。</p> <p>(2) 子育て支援者向け研修会 2回開催 →保護者の主体性を尊重し、エンパワメントできる寄り添い型支援について理解を深める研修会。講師にはどちらも精神科医を招いた。参加者のべ101人。</p> <p>(3) 地域へ向けた啓発講演会「こどものやる気の芽が育つととても大切なこと」 →講師：明橋大二さん（真生会富山病院心療内科部長） 参加者約170人。上越地域だけでなく、県内外の子育て中の保護者・支援者が参加。</p> <p>(4) 人材育成スキームの構築→法人内の基盤強化を図るため①メンター制度②スキルアップシートと定期的なチーフ面談③目標設定シートの仕組みづくりを行った。R5.4月～運用開始。</p>			<p>(1) WS「なかみをふやそう！わたしのしつけちえぶくろ」→乳幼児だけでなく、しつけの悩みの幅が広がる学童期の子を持つ保護者に対しても「前向きな養育イメージがもてる」「しつけの具体的な手法がわかる」といった点で効果があると検証できた。</p> <p>(2) 子育て支援者向け研修会 →上越市およびその近隣市町村の子育て支援者が「寄り添い型支援」について理解を深めた。全参加者の約9割が「寄り添い型支援が児童虐待の予防的な役割を果たす」と回答し、約6割が「現場で実践できる」と回答。</p> <p>(3) 地域へ向けた啓発講演会 →アンケート回収118枚のうち、約8割は「地域で支え合う子育ての重要性を感じることができた」と回答。子育ては保護者だけでなく、地域全体で担うものだという理解が促進された。</p> <p>(4) 人材育成スキームの構築→課題を話し合う中で、基盤強化のためにはマニュアル作成よりも「先の見通しをもって働き続けられる職場環境づくり」が先決であると認識でき、そのために必要な取組を打ち出すことができた。</p>	
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 望ましい社会状況を達成するための課題	
<ul style="list-style-type: none"> ・(1)の取組では、WSが乳幼児だけでなく学童期の子を育てる保護者に対しても、「児童虐待を未然に防ぐための効果がある」と検証でき、当団体が支援できる対象の幅が増え、提供できるメニューも増えた。 ・(2)の取組では、学童期の親子を支援するための知識や、親子に寄り添う支援について地域全体で理解を深めることができた。 ・(3)の取組では、幅広い立場や世代への広報力を法人全体で身につけた。また、200人規模の講演会の運営を複数の若手スタッフが経験し、スキルが上がった。 ・(4)の取組では、人材育成スキームを模索する中で、他の企業・団体の取組や研修方法、具体策などを調べる機会が増え詳しくなった。そのうえで、課題に対する解決方法を打ち出すスキルを身につけた。 			<p>● 児童虐待を未然に防ぐ取り組みの加速度を上げる必要性 (1)(2)について取り組む中で、当団体だけでは「寄り添い型支援」を短期間で普及させていくことに限界があると感じた。急速に少子化が進む中で虐待を未然に防ぐ取り組みの加速度を上げていくためには、団体内でも保護者向けの「虐待を未然に防ぐWS」や支援者に向けた「寄り添い型支援の理解を深めるための研修会」の講師ができる人材を増やしていく必要がある。と同時に、当団体以外にも実践できる支援者・団体が必要であるが、そこまで実施できていないことが課題。</p> <p>● 人材育成スキームの効果検証 今年度の取組で運用がスタートした①メンター制度②スキルアップシートと定期的なチーフ面談③目標設定シートが、本当に団体内の人材育成において効果があるのかを検証することが課題。</p>	
			■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）	
			この1年間の活動を通じて	上越地域で「児童虐待を未然に防ぐ」取組の普及に貢献を達成しました。
			■ 受益者の具体的な変化（自由記入）	
			<p>本事業参加後のアンケートで多く寄せられた声 <抜粋></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自分では考えもしなかったしつけの方法を知ることができた（保護者） ● 悩んでいるのは自分だけではないと気持ちが楽になった（保護者） ● 子育て支援者として親子の自己肯定感を高めたい（支援者） 	